

お伊勢参り

むかし、衣ヶ浦は、大府村のすぐ南まで広がっていました。

海岸には、緑深い森にかこまれたみさきがあり、そこからは、海をへだてた三河の熊村がながめられました。熊村の海辺には、枝を四方にのばした大きな松が生えていて、枝の風にゆれる音が、みさきまで聞こえてきました。

ここを訪れた村人は、

「美しい音だなあ。」

「琴をひいている音みたいだ。」

「そうだ。琴ひき松だ。」

と、いつていました。

みさきの北には、立派な山門をもつ延命寺があります。寺の南は、すぐ深い入江になっいて、船着場がありました。

そのころは、多くの人や物を運ぶには、陸上より、海上の方がはるかに有利でした

ので、知多半島の村々には、多くの船がありました。そこで、大府村に住むお金持ちの太郎左衛門も、「鎮東丸」という大きくて立派な船を造りました。

太郎左衛門は、吉日を選んで、

鎮東丸の初乗りのお祝いとして、

村人を無料で船に乗せて、お伊

勢参りをすることにしました。

一生に一度は伊勢参りをしたい

と願っていた村人たちは、大喜

びで参加しました。村人を乗せ

た鎮東丸は、延命寺の南を、

太郎左 太郎左

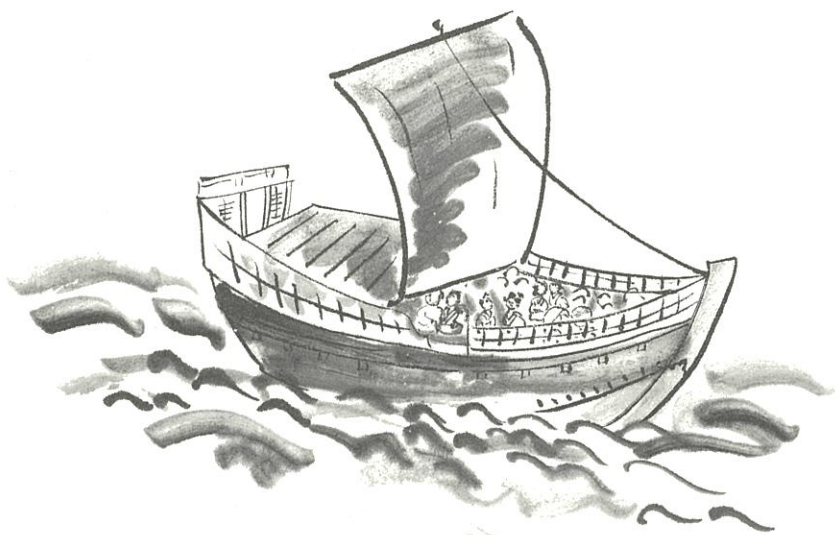
のう太郎左

太郎左さまが

鎮東に帆をかけて

延命寺下から

こぎ出せ



こぎ出せ

と、歌いはやしなから船出していきました。

船は、衣ヶ浦から三河湾を通つて伊勢湾を横ぎり、無事に伊勢に着くことができました。村人たちは、念願のお伊勢さんの内宮と外宮にお参りすることができました。

村の人たちは、村中安全や家内安全のためにお伊勢さんのお札を受けたほかに、

「有名な赤福餅をみやげにしよう。」

「わしは、生姜糖を買おう。」

「万病によくきく万金丹を買つたぞ。」

などといつて、わずかばかりのこづかいのなかから家族へのみやげ物を買いました。

その時、村役の人が、

「お伊勢さんの松は、神さんのおかげがあるといわれとる。石ヶ瀬川の堤に植えたらどうだろう。」

と、いい出しました。そのころ、江端の割木山近くの石ヶ瀬川の堤防が、ときどき大水のために切れて、田んぼが荒らされて困っていたのです。さつそく、お伊勢さんの小さな松を五、六本ゆずり受けました。

村人たちは、再び、鎮東丸に乗って、

太郎左 太郎左

のう太郎左……

と、歌いながら大府村をめざしてこぎ出して、無事に村へ帰り着きました。さつそくゆずり受けてきた松を石ヶ瀬川の堤防に植えました。

その後も、鎮東丸による伊勢参りは毎年続けられ、太郎左衛門は、村の人々からたいそう感謝かんじやされたということ。石ヶ瀬川の堤防に植えられた松もすくすくと育ち、伊勢木と呼ばれるようになりました。神さんのご加護かごがあつたのか、松を植えてからの堤防は二度と切れなくなりました。

大府地区に伝わる話です。みさきや入江があつたのは、朝日町や大東町付近です。今では、とても想像できません。伊勢木は、大府高等学校の東にありました。

「いせぎ」というのは、水を取り入れるいりこのことですが、このいせぎを伊勢木と考え、伊勢神宮の信仰と結びついたのでしょう。